

平成22年5月17日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2006～2009

課題番号：18320105

研究課題名（和文）中近世移行期における鉱山開発と地域社会の変容に関する研究

研究課題名（英文）A study on the development of mine and transformation of local society in 16-17th century Japan

研究代表者

池 享（IKE SUSUMU）

一橋大学・大学院経済学研究科・教授

研究者番号：20134885

研究成果の概要（和文）：本研究は、これまでの研究で十分に明らかにされてこなかった、中近世移行期の鉱山開発が地域社会に与えた影響の解明を課題としている。そのため、大規模鉱山よりも地域社会との関わりが密接な、砂金・土金採取を基本とする岩手県東磐井郡域の鉱山をフィールドに設定した。研究の到達段階を踏まえ、採掘統括責任者の家文書の目録作成・翻刻や、地名等の歴史情報の聞き取り調査など、研究の基礎となる情報の収集・整理に重点が置かれた。その成果は、A4版560ページの印刷物としてまとめられている。

研究成果の概要（英文）：The aim of our study is to make clear how development of mine influenced on local society. This theme has not been studied enough. So, we set up our field of study to the mines in Iwate Prefecture Higashiiwai District(岩手県東磐井郡). Because in this area, small scale alluvial mining is general, which is more closely connected with local society than big scale mining. What we have stressed on is to make lists and reprints of main miners' documents, and to research historical data of this area. They are basic data of the study. The results are printed as the report of our study(A4:560pages).

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	4,000,000	1,200,000	5,200,000
2007年度	3,700,000	1,110,000	4,810,000
2008年度	3,700,000	1,110,000	4,810,000
2009年度	4,400,000	1,320,000	5,720,000
年度			
総計	15,800,000	4,740,000	20,540,000

研究分野：日本史

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：御本判制度、大肝入、村肝入、産金遺跡、土金、山守

1. 研究開始当初の背景

日本の中近世移行期（16-17世紀）におい

て、金銀等の鉱山が全国的に開発され、世界

有数の生産量を誇った。その歴史的研究は、戦後になって小葉田淳・山口啓二氏らによって進められてきた。

小葉田氏の研究は、主著『日本鉱山史の研究』（岩波書店、一九六八年）および『続日本鉱山史の研究』（岩波書店、一九八六年）にまとめられている。主たる対象となっているのは、石見銀山・佐渡金銀山・生野銀山・院内銀山・阿仁金山など、幕府や藩が直轄支配し、大規模な坑道（間歩）を廻らせて掘削する直山である。検討内容は、著者自身が「鉱山の支配・経営さらに稼働・生産等の諸問題を歴史的に系統的に叙述していく」（『日本鉱山史の研究』vi頁）と述べているように、奉行組織などの支配制度、運上諸役などの収取、掘削・採鉱・選鉱・精錬冶金などの技術、山師・堀子などの経営・労働組織、そして鉱山町の構成や運営などが柱となっている。

その後の研究も、この線に沿って進められてきた。『梅津政景日記』の分析を通じて秋田藩の鉱山経営を解明した山口啓二氏は、「近世初期秋田藩における鉱山町」（同氏著『幕藩制成立史の研究』校倉書房、一九七四年所収）で、院内銀山の鉱山町の住民構成と、その需要を満たす商品流通を重点的に分析し、「領内の上方」としての性格を指摘している。また佐々木潤之介氏は、「諸産業の技術と労働形態 二 鉱山における技術と労働組織」（岩波講座『日本歴史11 近世3』一九七六年）で、採鉱労働と冶金技術に重点を置いて議論を組み立てているが、人間・社会関係に関する具体的事例は、石見銀山・甲斐金山に発する坑道掘りの組織であり、「小規模な鉱山を別とし」た人口数千人から一万人を超える大鉱山町である。

一九八〇年代にはいと、社会経済史的研究の発展という立場から、生産力の具体的あり方としての技術に関心が高まり、相次いで

「技術の社会史」シリーズが刊行された。その中で、山口啓二氏は「金銀山の技術と社会」（永原慶二・山口啓二他編『講座技術の社会史第五巻 採鉱と冶金』日本評論社、一九八三年）、佐々木潤之介氏は「鉱業における技術の発展」（佐々木潤之介編『技術の社会史2 在来技術の発展と近世社会』有斐閣、一九八三年）を執筆し、それぞれさらに深めた見解を述べている。

個別鉱山の研究としては、田中圭一氏が長年の研究を集大成した『佐渡金銀山の史的研究』（刀水書房、一九八六年）を刊行し、佐渡金銀山と鉱山町相川を対象に、近世における技術と経営、幕府の財政政策との関係、周辺地域との経済・文化交流など、多岐にわたる成果を明らかにしている。また荻慎一郎氏は、秋田藩の大葛金山・院内銀山を主たるフィールドとして、幕藩領主の鉱山支配・鉱山経営・鉱山の労働組織や技術や社会生活を実証的に解明した『近世鉱山社会史の研究』（思文閣出版、一九九六年）を著している。

こうした研究成果により、近世を中心とする鉱山社会の具体相が明らかにされてきたが、その主たる対象は大名権力が主導して開発が進められた大規模鉱山であり、その意義も大名の両国経営という観点から検討されてきた。しかし、近年の日本史研究では、こうした「上からの」視点だけでなく、地域社会に生活する民衆の視点から、歴史をとらえる重要性が強調されるようになっており、鉱山に関しても、さまざまな生業の複合によって成立している地域社会の具体相を明らかにするという視点から、歴史的に果たした役割を解明することが求められている。

2. 研究の目的

本研究は、こうした問題意識に基づき、鉱山開発が地域社会に与えた影響について、研

究することを目的としている。その際のフィールド設定に大きな特色がある。

1で述べたように、これまでの研究の主要対象は大規模鉱山だったが、そこでは、山師に率いられた金名子・堀子あるいは罪人・無宿者といった移動的労働力によって生産が行われ、彼らは周辺地域から「隔離」された鉱山町に集住し、彼らの生活や生産に必要な物資は、他地域から流通によって調達されていた。大規模鉱山と周辺地域との関係としては、出稼ぎや近隣農村からの日雇い稼ぎといった労働力や、薪炭・坑木等の生産・消費財の供給が指摘されているが、地域社会（とりわけ周辺の農村社会）との関連性は間接的だったといえよう。

しかし一方では、小葉田氏が述べているように、「農民が副業的に僅少の運上で砂金を採る」（『日本鉱山史の研究』一二頁）形態の鉱山も多数存在している。ここでは、農民が生活の場において採鉱を行っているのであり、当時の地域社会の圧倒的部分を占める農村社会と鉱山との関係を考える上では、こうした形態の鉱山の研究が不可欠である。

本研究は、こうした問題意識に基づき、小葉田氏も「仙台藩の産金業と本判の制度」（『日本鉱山史の研究』所収）で取りあげている岩手県東磐井郡（現一関市）を中心とする金山をフィールドに設定し、鉱山開発が地域社会にどのような影響を及ぼし、どのような歴史的展開を作り出したのかを解明することを課題としている。具体的論点としては、生産技術、開発・運営における資金の調達、労働者の確保・編成と移動、支配・収取制度と村（地域社会）との関わり、周辺社会との生産・流通・消費・文化的側面における関係、鉱山の盛衰と地域社会の変容などが挙げられる。

この地域には、横沢金山（所在地未確定、

旧室根村津谷川地区の中倉金山か）などの鉱脈を掘る坑道掘りの金山も存在したが、多くは砂金採取だったとされる。ただし砂金といっても、一般に考えられている川底や海岸の砂礫中に混じっているものだけでなく、地層の土砂中に混じっている金粒（「土金」、「つちがね」・「どきん」という）もあり、この場合は露天掘り（「実吉掘り」と呼ばれる）や、土坑掘り（「狸掘り」と呼ばれる）の形態で採取された。したがって、本研究のフィールドとしては最適と考えられる。

3. 研究の方法

仙台藩は、金掘りに従事する者に対し御本判と呼ばれる許可証を発行した。その数は、三千百五十九枚とも二千六百五十枚ともいわれ、その半数程度を東磐井郡域の者が取得した。御本判は個人に与えられ、毎年二匁一分ほどの役金を納めるかわりに、指定地域のどこでも掘ることができた。御本判役の取り立てや砂金採掘管理のために、村ごとに御本判肝入が置かれ、さらにその上に御本判大肝入が置かれた。

本研究では、「御本判」の大肝入（所持者の統括責任者）を務めた旧磐井郡東山町松川の鈴木家文書と、村肝入を務めた旧磐井郡室根町津谷川の畠山家文書について、目録および一部（元禄期まで）の翻刻を行った。

また、松川・津谷川地区で、本分家関係、屋敷名・屋号・通称、神社・氏子関係、小字地名、鉱山に関する産金地・水路の所在、山林の利用などについて聞き取り調査を行い、その内容を記載した地図を作製した。同時に、鈴木家・畠山家の墓地にある墓石等の石造物の調査も行った。

土金に関しては、気仙地域（陸前高田市・大船渡市・岩手県気仙郡）を中心に活動している「産金遺跡研究会」（代表平山憲治氏）

の協力により、当該地域の産金遺跡の現地調査を実施した。

4. 研究成果

本研究の成果は、『平成18年度～21年度科学研究費補助金研究成果報告書：中近世移行期における鉱山開発と地域社会の変容に関する研究』（A4版、560ページ）として印刷・刊行している。あらためて、その概要を記すならば、以下のようになる。

まず第一に、文書の悉皆調査に基づく目録作成および翻刻である。当該地域に関しては、『岩手県史』『宮城県史』などの自治体史をはじめとして豊富な研究蓄積があり、文書史料も一部は翻刻されているが、それぞれの研究者の問題関心にしがたって行われており、悉皆的な翻刻だけでなく、調査・整理・目録作成もなされていない。今回の研究で総てを行うことは到底不可能だったが、鈴木家・畠山家という重要な二つの家文書に関し、悉皆調査・目録作成と元禄期（ほぼ一七世紀末）までの史料の翻刻を行った。詳しくは、それぞれの解題をご覧いただきたいが、前者は、御本判制度だけでなく、「品替百姓」および名子制度を研究するうえで欠かすことのできない史料群であり、後者は、初めての本格的翻刻であり、御本判制度とともに製鉄や山林利用などに関する史料が多い。

第二に、地元の高校教員であり、東磐井郡域の自治体史編纂にも数多く関わった、千葉房夫氏の調査記録の目録作成である。これは、千葉氏が当該地域史研究を進める中で筆写した史料やフィールドノートの目録であり、ノートにして七〇冊以上という膨大なものであり、これまで公開されることはなかったが、中には既に散失した史料も含まれている。残念ながら内容まではお伝えできないが、極めて貴重な記録であり、どのように公開していくかは今後の課題である。

第三に、鈴木家・畠山家が所在する松川・

津谷川地区での聞き取り調査である。項目としては、本分家関係、屋敷名・屋号・通称、神社・氏子関係、小字などの地名、鉱山に関する産金地・水路の所在、山林の利用などである。報告書には、これらをまとめて地図上に落とした図を掲載している。また、墓石を中心とする石造物に関しても、畠山家の墓地などで調査を行った。

第四に、これまであまり注目されてこなかった、「土金」に関して、産金遺跡研究会の会員である野村節三氏に寄稿していただいた。「土金」採取の工程についてはそちらをご参照いただきたいが、大量に採掘した土砂から金を選り分けるために水路（黄金水路と呼ぶ）を現場まで引き、さらに、築場・金井戸と呼ばれる池で選鉱した。東磐井郡域においても、津谷川の畠山家の裏山を含め、こうした水路や池跡はほぼ全域に見られる。鉱山史研究において、「土金」採取について論じられることはほとんどなかったが、その作業のためには、大量の土掘り・運搬や水路・選鉱場造成のために、通常の砂金取りよりも大規模な労働力編成が必要であり、これと名子などの従属労働力の編成とは密接に関わっていたと思われる。その意味で、労働組織の問題を考える上でも、遅れているこの方面での具体的解明が期待される。

以上、今回の研究成果を紹介してきたが、今後の研究の基礎条件整備に大きく貢献したと評価できる。御本判制度とその運用については、未解明な点が数多く存在する。また、農業と一体となった小規模経営・労働編成についても、「土金」採取も視野に入れて検討を深める必要がある。さらには、採金から製鉄・林業・炭焼きなどへの生業の転換の問題、そこで重要性を増したと思われる山利用をめぐる相論や山守制度の問題、採金衰微に伴う逃亡・身売り・婚姻などの人の移動や他地

域との新たな関係の形成などの問題の解明にむけた展望が開けたといえよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

①平川新「スペインの対日戦略と家康・政宗の外交」、『国史談話会雑誌』50号、査読無し、2010年、193～209頁

②川戸貴史「一六世紀後半京都における貨幣の使用状況」、『東京大学史料編纂所研究紀要』20号、査読無し、2010年、40～58頁

③柳原敏昭「2008年の歴史学界—回顧と展望—日本(中世)—総論」、『史学雑誌』118巻5号、査読無し、2009年、73～76頁

④七海雅人「2008年の歴史学界—回顧と展望—日本(中世)六室町期の政治・法制・外交」、『史学雑誌』118巻5号、査読無し、2009年、85～87頁

[学会発表] (計1件)

①七海雅人「奥州(平泉)藤原氏・奥羽の武士団と中世武家政権論」、研究会「平泉とは何か」第4回、2009年12月6日、会場：岩手県平泉町役場

[図書] (計8件)

①池享『戦国期の地域社会と権力』吉川弘文館、2010年、336頁

②柳原敏昭(共著)「東北帝国大学時代の『生協』」『東北大学百年史 3・通史3 第4編 第2章』東北大学出版会、2010年、332～387頁

③柳原敏昭(共著)「太田正雄東北帝大医学部教授(木下李太郎)と学生たち」『東北人の自画像』の4、東北大学出版会、2010年、131～174頁

④池享『日本中世の歴史6 戦国大名と一揆』吉川弘文館、2009年、249頁

⑤渡辺尚志『百姓の主張』柏書房、2009年、228頁

⑥渡辺尚志『百姓たちの江戸時代』筑摩書房、2009年、175頁

⑦小林一岳『日本中世の歴史4 元弘と南北朝の動乱』吉川弘文館、2009年、265頁

⑧蔵持重裕・小林一岳・黒田基樹・長谷川裕子・遠藤ゆり子(共著)『中世の紛争と地域社会』、岩田書院、2009年、396頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

池 享 (IKE SUSUMU)

一橋大学・大学院経済学研究科・教授
研究者番号：20134885

(2) 研究分担者

柳原 敏昭 (YANAGIHARA TOSHIAKI)

東北大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：30230270

(H20：連携研究者)

七海 雅人 (NANAMI MASATO)

東北学院大学・文学部・准教授
研究者番号：00405888

(H20：連携研究者)

(3) 連携研究者

菅野 文夫 (KANNO FUMIO)

岩手大学・教育学部・教授
研究者番号：40186177

(H18→H19：研究分担者)

蔵持 重裕 (KURAMOCHI SHIGEHIRO)

立教大学・文学部・教授
研究者番号：70153369

(H18→H19：研究分担者)

小林 一岳 (KOBAYASHI KAZUTAKE)

明星大学・人文学部・教授
研究者番号：20298061

(H18→H19：研究分担者)

長谷川 博史 (HASEGAWA HIROSHI)

島根大学・教育学部・准教授
研究者番号：20263642

(H18→H19：研究分担者)

平川 新 (HIRAKAWA ARATA)

東北大学・東北アジア研究センター・教授
研究者番号：90142900

(H18→H19：研究分担者)

渡辺 尚志 (WATANABE TAKASHI)

一橋大学・大学院社会学研究科・教授
研究者番号：10192816

(H18→H19：研究分担者)

(4) 研究協力者

遠藤ゆり子 (YURIKO ENDO)

立教大学・文学部・兼任講師
長谷川裕子 (YASUKO HASEGAWA)

立教大学・文学部・兼任講師
川戸貴史 (TAKASHI KAWATO)

日本学術振興会特別研究員

黒田基樹 (MOTOKI KURODA)

駿河台大学・法学部・准教授
糟谷幸裕 (YUKIHIRO KASUYA)

一橋大学・大学院社会学研究科・博士後期課程

藤井崇 (TAKASHI FUJII)

東京大学史料編纂所学術支援職員